

信頼と不信

——錯綜する教師へのまなざし——

山田 浩之

【要旨】

本稿は、小説、映画、マンガなどに描かれる教師像を「熱血教師」を手がかりとして分析することで、教師への錯綜するまなざしを明らかにすることにある。「熱血教師」は現在のテレビドラマなどに見られる画一的な教師像であるが、これは現在も教師への信頼が強いことを示す。その一方で、メディアでは教師への批判が数多く報道されている。本稿ではこうした教師への信頼と不信の錯綜したまなざしと教師像の変化を検討した。

「熱血教師」は1960年代に石原慎太郎『青春とはなんだ』で提出された教師像であった。その特徴は、教育への情熱、教師らしさの無さ、理想的人間像の他、教師と生徒の関わりに物語の重点が置かれていること、さらに児童生徒の私的領域に押し入ってまでの問題解決であった。こうした教師像は、日本の現実の教師の行為を反映したものでもあった。

その一方で、1980年以降、マンガの中では児童生徒の私的領域に関わらない不良教師が描かれるようになった。このことは、現実の社会でも教師が児童生徒の私的領域に関われなくなったことを示している。それにもかかわらず教師には「熱血教師」として、なおも児童生徒の私的領域に関わることが求められている。

以上の議論をもとに、教師に対するまなざしを多様化し、個々の教師の多様性に着目することの重要性を指摘した。

キーワード：教師像、メディア、熱血教師

1. はじめに

「教師」は、テレビドラマで描かれることのもっとも多い職業の一つである。ドラマには華やかな職業が描かれるが、そこで描かれる職業はそれほど多様なわけではない。ミステリーやサスペンスでの刑事や、医者や弁護士といった専門職など、物語を盛り上げるための花形とも言える職業が定番となっている。そうした中、教師を主人公としたドラマは、常に制作され放映されている。

しかも、教師を主人公としたドラマの中には大ヒットするものも少なくない。2000年以後にも『ごくせん』（日本テレビ系列、2002年）や『ROOKIES』（TBS 系列、2008年）など、いずれも教師を主人公とし、しかもマンガを原作としたテレビドラマが人気を呼んだ。これらのドラマは、シリーズ化されるだけでなく、映画化もされるなど大きな話題となった。

このように教師を主人公としたドラマが次々と制作されるのは、たんに数多くの人々が教師に関心を持ち、注目をしているからという理由だけではないだろう。それ以上に教師という職業に対して強い期待と信頼が寄せられていることによる。つまり、教師という職業が個人、あるいは社会をも変化させる可能性を持つという、ある種の信仰にも近い神話が存在している。そうした神話を背景にして、数多くの教師ドラマが制作されてきた。

しかし、こうしたイメージは現実の教師に対するものとは大きく異なっている。ドラマ以外での教師に関する報道やワイドショーなどでの語りは、とても強い期待と信頼が寄せられているとは言えない。むしろ、教師による犯罪など相次ぐ不祥事により、教師に対する不信が募っている。教師批判が高まっているとも言ってもよからう。つまり、現実の教師に対するイメージは、ドラマとはまったく対照的である。

このように教師に対するイメージは混乱しており、錯綜している。それでは、こうした虚構の中での教師への信頼と、現実での不信という二律背反的な状況はいかにして作られ、また語られてきたのだろうか。本稿は、このように教師イメージが錯綜した要因の一端を示そうとする試みである。その際、用いる資料は、いわゆる文芸メディア、すなわち小説や映画、そしてマンガなどである。これらのメディアに描かれた教師を分析することで、戦後における教師へのまなざしの変化を検討したい。

2. 賞賛の対象としての教師—「熱血教師」の時代

2.1. 「熱血教師」の登場

先に指摘したように、これまで数多くの教師を主人公としたテレビドラマが制作されてきた。こうしたテレビドラマの特徴は、そこで描かれる教師が、多かれ少なかれいわゆる「熱血教師」であるという点にある。たしかに教師の属性や児童生徒への態度を特徴的なものにするなど、さまざまな形で主人公教師の性格付けは差別化されてきた。しかし、多くの場合、そこで描かれている教師は「熱血教師」というカテゴリーに集約されるだろう。

こうしたドラマでは、原作がマンガである場合も少なくない。そうした場合、『GTO』（フジテレビ系列、1998年、藤沢とおる原作）や『ごくせん』（森本梢子原作）のように原作では必ずしも「熱血教師」とは言えないようなものでも、テレビドラマでは「熱血教師」として、画一的な性格づけがなされている。また『ROOKIES』（森田まさのり原作）は、原作のマンガでは主人公教師の熱血さが一種のパロディとして描かれ、それが笑いの対象となっている。つまり、原作ではその熱血さは、必ずしも教師として「良い」資質ではないかもしれない。しかし、テレビドラマでは、そうした笑いの対象という性格づけは希薄となり、むしろ「熱血教師」であることが望ましいものとして描かれている。すなわち、テレビドラマというメディアの中では、教師は画一的な「熱血教師」という共通の要素を持った者として描かれている⁽¹⁾。本稿の冒頭で述べたことを敷衍すれば、こうした画一的な「熱血教師」こそ、賞賛の対象になっていることになる。

それでは、こうした「熱血教師」はいかにして物語に登場するようになったのだろうか。ここで厳密に「熱血教師」の原点を明らかにしようとすれば、その定義を明確にする必要があるのだろう。しかし、「熱血教師」という概念は主観的なものにすぎず、その定義は非常に難しい。そこで以下では文芸作品に描かれる教師像の変化から、「熱血教師」というステレオタイプがいかにして描かれるようになったのかを指摘しておこう。

教師を主人公とする物語は、戦前から数多く発表されてきた。夏目漱石『坊っちゃん』をはじめとし、島崎藤村『破戒』、田山花袋『田舎教師』、さらには壺井栄『二十四の瞳』など、文学史上に残る作品も少なくない。こうした作品は、たしかに当時の教師の姿、あるいは教師へのまなざしを反映したものである⁽²⁾。

しかし、こうした作品の主人公を「熱血教師」だと考える者は少ないだろう。こ

これらの作品は、教師個人の経験や成長、また挫折を描いている。「熱血教師」ものの特徴ともいえるような、教師の活躍や、児童生徒との熱い関係がテーマにはなっていない。それはよく誤解される『二十四の瞳』でも同じであり、少なくとも小説の中では教師と生徒の濃密な関わりは明確に描かれていない。

管見の限りでは、明白に主人公を「熱血教師」だと言える最初の作品は石原慎太郎『青春とはなんだ』である。『青春とはなんだ』は1963年から雑誌に連載され、1964年に単行本として出版された。出版された翌年の1965年には日活で舛田利雄監督、石原裕次郎主演で映画化され、さらにその3ヶ月後には夏木陽介主演で日本テレビ系列でドラマ化もされた。現在ではほとんど知られていない作品ではあるが、当時の話題作の一つであったと言ってよかろう。実際に石原慎太郎のホームページでは出版部数30万部、氏の出版物の中では第9位の売り上げとされている⁽³⁾。

それでは『青春とはなんだ』の主人公はいかに「熱血教師」なのだろうか。そのあらすじを簡単に紹介しておこう。

『青春とはなんだ』は、主人公の野々村健介が片田舎の小さな町に現れるところから物語がはじまる。野々村健介は、アメリカから帰国したばかりの青年で、その語学力をかわれてその町の高校で英語教師となった。しかし、その風体はとても教師には見えず、最初に入った小料理屋ではヤクザと間違われるほどであった。また、英語もアメリカでの実体験で身に付けたもので、正式に教育法などを学んだわけでもない。そうした型破りな教師が、生徒の問題や学校の抱える課題を次々に解決していく。

野々村は、まずラグビー部の部長となり、不良たちを強制的にラグビー部に引き入れる。彼は、ラグビーを通した体と体のぶつかりあいによるコミュニケーションを不良たちと図ることで、その更生を目指すのである。こうしたスポーツを通じた生徒との関わりあいは、この後の「熱血教師」ものの定番になっていく。

また、生徒の問題を解決するために、野々村は積極的に生徒の家庭へと押し入っていく。進学を理由に親から恋愛を禁じられた生徒のために、野々村はその父親と直談判し、勉強のみの人生のむなしさと青年期の恋愛の大切さを説く。また、貧困ゆえに高校に通えなくなった生徒の家を訪ねたり、ヤクザにとらわれた生徒を助け出すために体をはったりもする。さらには、学校の体育文化ホールの建設で不正を働こうとする建設会社の社長のもとに乗り込み、その不正をただす。

こうして野々村はその行動力によって次々と問題を解決する。そうした行為の背景には、学校の価値観とは真っ向から対立する野々村の考え方がある。この考え方

は成績の良い生徒，高松を東大に進学させようとする校長や教頭に対する反発によく現れている。東大進学を重視する校長らの考え方を，彼は「つまらん」と一言の下に否定し次のように述べる。

学校の俗物秀才教育の成績が悪くたって，他の何かで取り柄のあるすばらしい何かを持ったやつが沢山いるんだ。ただその連中は，今の中学，高等学校の教育の中じゃ，いわゆる秀才になれず陽の目を見ずに小さくなり，そのまま自分のすばらしい個性を見つけ切れず，駄目になってしまうのが多いんです。違いますか。(石原 p.94)

このように野々村は学校での成績の重視，また学歴や「良い」大学への進学のみを目的にした教育を否定する。学校的な価値観にとらわれない，人間的な成長を重視するのである。こうした行為や考え方を見れば、『青春とはなんだ』の主人公，野々村を「熱血教師」ではないと否定する者はいないだろう。

2.2. 「熱血教師」の特徴

『青春とはなんだ』で提出された「熱血教師」像の影響力は，この作品の映画化やテレビドラマ化といったものととどまらない。その教師像はその後のテレビドラマなどに多大な影響を与えた。それを示すのが，テレビドラマ『青春とはなんだ』以後の，青春ドラマのシリーズ化である。「熱血教師」を主人公とするドラマは，これ以後，継続的に制作され続けることになった。

もちろんシリーズ化されたドラマすべてが成功したわけではない。しかし，1972年の『飛び出せ！青春』（村野武徳主演，1972年），『われら！青春』（中村雅俊主演，1974年）のように，好評を博した作品は数多い。これらの作品は親しみやすい主題歌とともに多くの人々に深い感動を与えたとされる。こうしてこのシリーズは，少しずつ物語や教師像を変化させながら，1980年代の初めまで続いた。

この青春ドラマシリーズが終わるのは「熱血教師」ドラマの人气が落ちたからではない。むしろ，1980年前後に各局で教師を主人公としたドラマが制作されたため，とくにこのシリーズが必要とはされなくなったのだろう。『青春とはなんだ』で形成され，青春ドラマシリーズとして継承されてきた「熱血教師」は，1980年代前後に，『熱中時代』（日本テレビ系列，水谷豊主演，1978年），『三年B組金八先生』（TBS系列，武田鉄矢主演，1979年），『教師びんびん物語』（フジテレビ系列，田

原俊彦主演、1988年）など、数多くのテレビドラマで、そのバリエーションを展開させることになる。なかでも『スクール☆ウォーズ』（TBS 系列、山下真司主演、1984年）は、『青春とはなんだ』の「熱血教師」を、まさに成熟させたものであった（山田 2010 参照）。

こうして1980年代以降、さまざまな「熱血教師」ドラマが制作され、現在もなお制作され続けている。それでは、こうしたドラマで描かれた「熱血教師」の特徴はどのようにまとめられるだろうか。すべてのドラマに描かれた教師像から「熱血教師」を定義することは、先にも指摘したように非常に難しい。しかし、その特徴を最大公約数的にまとめることは不可能ではないだろう。実際に、山田（2004）は、マンガに描かれた「熱血教師」を分析し、その特徴を次の3点にまとめている。

1) 教育への情熱

学校や生徒の問題を、さまざまな障害や、他の教師や生徒、保護者からの抵抗にもかかわらず解決しようとする強い教育への情熱を持つ。

2) 教師らしさの無さ

教師としての保身を考えず、何事にもひるまずに行動する。また、喧嘩の強さ、服装（ジーンズや汚い服装）、学歴の高さ（留学経験や大学院卒）など、さまざまな属性が教師らしさの無さを示す。

3) 理想的な人間像

たんに理想的教師像ではなく、むしろ理想的人間像が描かれる。すなわち、生徒があこがれる人間像が「熱血教師」である（以上 山田 2004 pp.29-30）。

さらに『青春とはなんだ』などで描かれた「熱血教師」の特徴として、次の2点も指摘できるだろう。一つは、教師個人ではなく、教師と生徒との関わり合いが物語の中心になることである。『青春とはなんだ』以前の教師に関する物語は、いずれも教師個人の物語であった。もちろん教師を描くためには、生徒との関係が必要とされる。しかし、それまでの物語での中心はやはり教師であり、その個人的な経験と成長が主題となっていた。しかし、「熱血教師」の物語は、教師のみでなく、生徒との関わり合い、さらには教師と生徒の両者の成長が物語の主題とされている。

もう一つは、教師の問題解決の仕方である。山田（2004）は、これを「教育への情熱」と「教師らしさの無さ」の中で指摘している。しかし、実際の「熱血教師」の行為は、たんなる情熱や態度にとどまらない。「熱血教師」は、その優れた行動力により児童生徒の問題を非常に強引に解決してしまう。つまり、問題を見つけると、解決のために、児童生徒の私的領域、すなわち家庭や恋愛などのプライバシー

に関わる部分にまで無理にでも押し入っていく。同僚の教師が見て見ぬ振りをしていた児童生徒の問題や学校の課題を、こうして強引に解決していくのである。

2.3. 現実の「熱血教師」

このように「熱血教師」の特徴を、児童生徒の私的領域への関わりととらえると、その教師像は現実と重なり合う。実はこのように児童生徒の私的領域に関わる教師の姿は、日本では決して珍しいものではなかった。すなわち「熱血教師」は、現実の世界にも存在したのである。

例えば、光の村学園の西谷英雄などのように、公立学校での教育に不満と限界を感じた一教師が、自ら学校を設置して教育に専心するという事例は数多い⁽⁴⁾。自身を省みずに教育に情熱を捧げる姿は、まさに物語の「熱血教師」と重なるだろう。

私財を投げ打つほど情熱的ではないにしても、児童生徒の家庭と深い関わりを持って指導をする教員は数多く、また、そうした指導は日常的なことでもあった。例えば映画『キューポラのある街』（日活、1962年）では、吉永小百合演じる主人公の進路決定に担任の教師が重要な役割を演じる。そこでは教師が家庭を訪ね、貧しいがゆえに志望高校への進学を諦めざるを得ない主人公の進学について助言をしていた。同様に、さまざまな理由で進学を拒む保護者を教師が説得し、その結果、生徒が旧制中学校や高校に進学したという事例も自伝などでよく見られる話である。

つまり、日本の教師は、学校でたんに勉強のみを教えることを職務とはしてこなかった。必要があれば、児童生徒の家庭を訪ね、家庭の問題にまで介入することもあった。それはいわば地域住民の教育でもあり、そのことが学校を通じた、地域の近代化をもたらすことにもなった。

広田（1998）は、こうした学校と教師の役割について、次のように指摘している。

60年代までの学校は、「封建的」で「遅れた」地域社会の旧慣を打破し、民主的で進歩的な社会や家庭を作るための〈啓蒙の装置〉であった。経済的貧困や文化的落差の存在を前提にして、学校は地域や親の基本的な信頼を調達できていた（広田 1998 p.159）。

つまり、学校への強い信頼と近代化への要求を背景にして、教師の多様で広い役割と、そうした役割への社会からの期待が作り出された。そうした時代の要請による教師の理想像、それこそが1960年代の「熱血教師」を生み出したのである。

また、こうした教師と家庭、地域との繋がり、日本に特徴的なものともされる。日本とアメリカでの異文化教育を比較したフィンケルスタインは、日本の教師について次のように述べている。

日本の教育者は、教師の権威は教室や学校を超えて家庭や地域にまで及んでいるという前提を持っている。子どものある部分については教師の役割、その他の部分は保護者の役割というように、子どもを細かい部分に分けてしまうことはできず、またそれを望んでもいないため、日本の教師は定期的に家庭訪問をし、生徒の学習の努力を妨げる障害を見つけようとする。日本の教師が保護者に助言をし、子どもの学習を支援する方法を示したりすること、また、子どもの教育で保護者は協力者である—すなわち宿題を手伝い、制服や学用品を購入して名前を記入し、遠足のお弁当を準備し、必要に応じて指導を行う—と考えることは珍しいことではない。(Finkelstein, 訳書 pp.393)

こうして日本では教師が積極的に児童生徒の家庭と関わる一方で、「アメリカでは、教師の権威は学校での学業的側面に限られ、制限されているという前提を教育者が持っている」(Finkelstein, 訳書 pp.396)とされる。つまり、アメリカでは敢えて教師は家庭と関わらず、学校での学業の教育が教師の職務の中心とされるというのである。

したがって、児童生徒の家庭へも積極的に関わろうとする「熱血教師」は欧米とは異なる日本独特のものであろう。それはすなわち日本社会の文脈の中で作られた教師への期待であり、日本での教師の理想像を体現したものであった。こうして「熱血教師」は現在も賞賛の対象となり、現実の教師にも「熱血教師」であることが期待されている。

3. 教師への不信

3.1. 否定される「熱血教師」

ここまで明らかにしてきたように、1960年代に現れた「熱血教師」像は、当時の教師への信頼と期待を背景にし、現実の教師が教室という枠を越えて児童生徒との関係を持っていたことを反映したものであった。つまり、当時の教師の理想像が「熱血教師」を生み出したとも言える。

しかし、こうした教師への期待の高まりは、同時にそれに応えられない教師に対

する不信も生み出してきた。とくに近年になって、教師への不信はさらに高まって
もいる。それでは「熱血教師」とは一見対照的な教師への不信はいかに形成され、
またどのようにメディアの中で提示されてきたのだろうか。以下では、大きく2つ
の視点から、教師への不信について検討したい。

教師への不信を生み出したものの一つは、1980年代以降の教師像の変化である。
筆者がすでに検討してきたように（山田 2004）、テレビドラマとは異なり、マン
ガには「熱血教師」はあまり描かれてこなかった。『青春とはなんだ』で「熱血教
師」像が提示され、それが大きな話題となっても、1960年代から70年代に描かれた
マンガに登場する「熱血教師」はごく限られていた。

そうしたなかで「熱血教師」に近い性格を持った教師が描かれたのは、1970年代
までのいわゆる少女マンガであった。この時期、いわゆる少女マンガでは、さかん
に教師を主人公としたマンガが発表されていた。それが『花よめ先生』（里中満智
子、1971年）、『出席をとります』（灘しげみ、1972年）、『オッス！ Gパン先生』
（金子節子、1979年）などである。こうしたマンガに描かれた教師たちは、教育へ
の強い情熱と、当時の詰め込み教育を否定するなど反学校的な価値観を持つととも
に、ジーンズやミニスカートといった教師らしくない服装をしていた。つまり、
「熱血教師」そのものではないにしても、その要素の一部を持っていた。

こうした教師マンガが描かれた背景には、教師が、当時の女性が自立するために
重要な職業の一つであったことがある。それゆえ少女たちの将来のキャリアを提示
するものとして、教師を主人公とするマンガが数多く発表されたのだろう。したが
って、そこで描かれた教師は、現実の教師の理想像ではなく、少女たち自身の理想
像、つまり将来の夢の職業を反映したものであった。

1980年代以降、マンガの中の教師たちは一変する。その一つが教師の不良化であ
る。つまり、少女マンガの中から教師が姿を消すと同時に、少年マンガの中では主
人公の教師がいずれも「不良」になる。80年代初頭の『コンボラ先生』（もとはし
まさひで、1981年）以降、『はいするーる仁義』（水穂しゅうし、1985年）から、近
年の『GTO』（藤沢とおる、1997年）まで、少年マンガでは一貫して不良教師が描
かれてきた。

もう一つの変化は、「熱血教師」が笑いの対象にされるようになったことである。
多くの不良教師マンガで、主人公の敵役などとしてスポーツの得意な教員が描かれ
る。その教師の語る言葉は、「青春」や「ひとりみんなのために」といった、「熱
血教師」を特徴付ける言葉である。しかし、主人公との「対決」で惨敗したり、ま

た表面的な美辞麗句の裏で不正を働いたりするなど、理想的教員像とはかけ離れた姿が描かれる。『GTO』に登場する体育教師、袋田はその典型と言ってよかろう。

また『ファンキーモンキーティーチャー』（守山鶴，1987年）では、さらに直接的に「熱血教師」がパロディの対象とされている。これは常識知らずの体育教師を描いたギャグマンガであり、いわばかつての「熱血教師」の奇矯な行動を戯画化したものと言っても良いかもしれない。すなわち、1980年代以降、マンガの中では「熱血教師」は笑いの対象になるとともに、忌み嫌うべき者として扱われるようになった。

それでは、こうしたマンガの中の教師の変化は何を示しているのだろうか。実は、「熱血教師」ドラマと、不良教師マンガでは、その物語の構造自体は大きく変化していない。すなわち、「熱血教師」と同様に不良教師も児童生徒や学校の抱える問題を次々に解決していく。例えば『GTO』では、主人公教師の鬼塚英吉が、いじめなどの学校内の問題から誘拐といった重大な犯罪まですべての問題を解決する。そうした意味では、不良教師は「熱血教師」を現代に置き換えたものと言っても良い。ある意味で、現在の児童生徒にとっての理想の教師像が不良教師なのかもしれない。

しかし、不良教師と「熱血教師」が大きく異なるのは、その生徒や学校との関係の持ち方である。山田（1999）ですでに指摘したように、不良教師は生徒の抱える問題に直接関わろうとしない。そうした問題に気づかないし、気づいたとしても取り合おうとはしない。つまり「熱血教師」のように積極的に問題を解決しようとはしない。不良教師が行動を始めるのは、問題があまりに大きくなり、不良教師自身の立場を脅かすようになってからである。つまり不良教師は自己保身の延長として、生徒や学校の問題を解決する。

このような不良教師の描かれ方は、1980年代以降、現実の教師に期待される役割が変化したことを示しているのだろう。先に指摘したように、日本の教師は、児童生徒、およびその家庭の問題へと大きく関わることを期待され、またそのように行動してきた。しかし、80年代以降、児童生徒の私的領域との関わりを持つことは難しくなってしまった。つまり、教師は期待される役割を遂行できなくなってしまったのである。

こうした教師と児童生徒との関係の変化には、価値観の多様化や私事化など、さまざまな要因が考えられよう。この点について先にも引用した広田は次のように述べている。

ところが、地域・家庭の文化水準が高まり、経済的にもそれなりの生活が誰にでも可能になってくると、学校が与えるもの、学校で要求されるものが、必ずしも「ありがたいもの」と映らなくなってくる。今や、別に学校で集団訓練を受けなくたって一人前に生きていけるようになったのである。また、体罰を我慢していい学校に進学したとしても、得られる報酬にはたいした違いはなくなってきたのである。(広田 p.160)

こうして「親と学校との力関係が拮抗ないしは逆転」(同上 p.163)してしまうと、むしろ教師の行為が保護者の監視下に置かれることになってしまった。こうして物語の中では、児童生徒やその私的領域に関わらない不良教師が生み出されることになった。

それにもかかわらず、現在もなお現実の教師にはかつての「熱血教師」のように、児童生徒や家庭の私的領域に関わり、その問題を解決することが期待されている。テレビドラマでの「熱血教師」ものの繁栄は、現在もこうした期待が強いことを象徴している。

しかし、当然のことであるが、現在の現実の教師がこうした期待に応えることは非常に難しい。こうして期待に応えられない教師には、不信の目が向けられることになる。

3.2. 「熱血教師」という呪縛

もう一つの教師への不信を生み出したものは、メディアとの繋がりから導かれた現在の教師の問題である。すなわち「熱血教師」という固定観念、もしくは教師の理想像そのものが、教師への不信を生み出している。

これまでの述べてきたように、現在もなお「熱血教師」は「理想」とされる教師像を反映していると考えることができよう。しかしながら、社会の変化や教育の位置づけが1960年代とは大きく変わったにもかかわらず、理想とされる「熱血教師」の姿は変化していない。すなわち、「熱血教師」という教師像の固定観念が、現実の教師の行為を縛ってしまうのである。それでは、なぜ「熱血教師」という教師像は変化しないのだろうか。

こうした固定観念は我々がメディア、そしてメディアの中の教師を受容する過程によって作られ、維持、強化される。メディアでは、さまざまな教師像が描かれる。しかし、我々がそうした物語を受容する時、教師の、また物語の個別性は捨象され

てしまう。

佐藤（1997）は『二十四の瞳』を例にあげながら、こうした教師像受容の歪みを指摘している。佐藤は「教師は、まず人間であれ」や「『人間性』こそが教師にもっとも重要な資質である」という言葉であらわされる教師の規範を「人間主義」と呼び、これが「教師に関する一般的な議論の自明の前提となっている」と指摘している（佐藤 1997 p.313）。つまり、一般の教師に対する認識は、この人間主義の規範によっている。そのため、教師の物語を受容する際、そこで提示される教師像が人間主義によって規定されてしまう。その結果、『二十四の瞳』の主人公、大石先生が生きた現実が捨象され、人間主義により理想化された大石先生像が一人歩きをしているという。

ここで佐藤の言う「人間主義」は、「熱血教師」と重なるものであろう。我々は同様に、多くのメディアに登場する教師を「熱血教師」として見ている。テレビドラマでは『3年B組金八先生』、マンガでは『ごくせん』（森本梢子、集英社）の山口先生や『ROOKIES』（森田まさのり、集英社）の川藤先生など、実際にメディアで描かれた教師はさまざまである。しかし、我々はこうした物語に描かれる教師を、いずれも「熱血教師」として一元的に見てしまう。マンガを原作とするテレビドラマの多くが、画一的な「熱血教師」を作り出しているのが、このことを示しているだろう。

また、そうしたまなざしは物語の読み取りに向けられるだけではない。現実の教師の行為を読み取る際にも、そのまなざしが用いられる。すなわち現実の教師の行為もまた「熱血教師」という枠組みにより読み取られ、再構成されることになる。その結果、教師の評価は、「熱血教師」という固定観念からのズレで行われることになる。こうして生じるのが「やはり現実の学校には金八先生のようなすばらしい先生はいない」という形での教師批判であり、また「現実の学校にも金八先生がいてほしい」という教師への期待である。あるいは、そのように直接的に「熱血教師」が規準として採用されないまでも、教師はかくあるべしという固定観念が教師を見るまなざしを支配していないだろうか。

教師の社会学に関する古典である Waller (1932) は、教師に対する社会通念として、悪意を持って教師の特徴をあげつらう「漫画的な教師像」と教師を理想化した「ぎせいの精神に富む」教師の2つがあると指摘している。その上で、教師に対してこうした相反する二つの固定的なイメージが付与されるとともに、教師はそこで作られた「教師像というワクの中にとじこめられている」とする（以上、Waller

1932, 訳書 pp.524-525)。つまり固定的な教師イメージが社会的に作られており、それが教師の行為を規定しているのである。

こうして虚構と現実とは混同され、教師は一元的な規準で見つめられるようになる。現実の教師がその規準、すなわち「熱血教師」からズレることは、教師に対する不信をさらに増大させることになるだろう。

4. 脇役教員の憂鬱

ここまで「熱血教師」を手がかりに、教師への信頼と不信が錯綜している状況を検討してきた。ここでの議論は、基本的に1960年代の教師への信頼が、80年代以降、不信へと転換するという枠組みで行ってきた。これまでの教師、また学校に対する意識の変化も、同様のストーリーで論じられることが多い。だが、果たして教師へのまなざしは、本当にこのように単純に変化したのだろうか。

実際には、教師へのまなざしは、すでに1960年代から入り交じり、錯綜していた。それはメディアに描かれる「熱血教師」ではなく、その周辺を取り巻く脇役教師を見れば明らかだろう。1960年代に描かれた「熱血教師」ものの脇役教師は、受験を重視し詰め込み教育を推進していた。また、生徒の問題を見て見ぬふりをして、自分の職務だけをこなす「デモシカ教師」でもあった。こうした教師像は、当時の学校批判、教師批判を反映したものであった。

主人公が不良教師になった現在も、脇役教員は社会の教師批判を反映している。脇役教員が起こす問題行為はセクハラや体罰といった学校内のものにとどまらない。痴漢行為や盗撮など猥褻な犯罪にまで広がっていく。マンガ『GTO』では、脇役教員のこうした行為が繰り返し描写されている。

このような脇役教師の姿は、まさに一般社会の教師像、すなわち教師不信を示すものである。教師不信は学校への信頼が強かった1960年代にも存在し、それが形を変えながら現在まで続いてきた。すなわち、教師への不信は、程度の差こそあれ、いつの時代にも存在していた。むしろ、「熱血教師」や不良教師は、こうした教師不信によりアンチテーゼとして作られたものだと解釈すべきであろう。

しかし、このような教師不信もまた、メディアによって作り出された虚構の教師像の一つにすぎない。もちろん教師の不祥事は存在し、それが重大な問題であることは間違いない。しかし、そこで作られたイメージをすべての教師に敷衍するのは適切ではない。「熱血教師」という理想像であれ、教師不信であれ、虚構で作られた固定的イメージを安易に現実の教師に向けるべきではない。しかし、実際には、

教師に対する負のイメージは拡大され、それもまた固定観念として教師の行為を縛っている。

このように考えると、教師への不信をぬぐうために必要なのは、こうした固定的教師像の破壊なのかもしれない。伝統的な固定的教師像にとらわれず、多様な教師像を提出し続けること。それこそが一面的な教師不信を払拭することに繋がるのではないか。

実際に現実の教師は一人一人が個性を持っており、多様という以上に千差万別である。そうした現実の教師の姿を一つ一つ描き出し、既成の教師像を解体することが教師という職業に対する理解を深めることになろう。こうした作業が我々研究者の課題の一つである。

〈注〉

- (1) このようにテレビドラマの教師像が画一的になる要因の一つは、その視聴者が幅広い層、とくに年齢が上の世代にまで広がっていることであろう。この点については山田（2004）、iV 頁を参照されたい。
- (2) 文学作品に描かれた教師については伊ヶ崎（1986）などで分析されている。
- (3) 石原慎太郎のホームページ（<http://www.sensenfukoku.net/nbest/nbestm.html>：2010年4月23日）による。
- (4) 広島大学の2009年度ベストロッチ教育賞授賞式での講演による。同様に教育賞などで表彰される元教師の多くが、いわば「熱血教師」であった。また、現在も若者自立塾や夜回り先生などの活動は「熱血教師」的である。

〈参考文献〉

- Finkelstein, B. 1997 "Educating Strangers: A Comparison of Cultural Education Policies and Practices in Japan and the U. S." in Patterns of Value Socialization in US Primary Schools: A Comparative Study, Faculty of Human Sciences Osaka University. (= 邦訳：2009, 「異邦人の教育」 ローレンス・マクドナルド『世界から見た日本の教育』日本図書センター。)
- 広田照幸, 1998, 「学校像の変容と〈教育問題〉」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学他『岩波講座 現代の教育 危機と改革2 学校像の模索』岩波書店。
- 伊ヶ崎暁生, 1986, 『小説のなかの教師たち』みくに書房。
- 石原慎太郎, 1968, 『青春とはなんだ』講談社。

佐藤学, 1997, 『教師のアポリア』 世織書房。

Waller, W. W. 1932 The Sociology of Teaching, John Wiley. (= 邦訳: 石山脩平・橋爪貞雄訳『学校集団—その構造と指導の生態』 明治図書。)

山田浩之, 1999, 「マンガの「熱血教師」はどこに消えたのか」『論座』(平成11年6月), 朝日新聞社。

山田浩之, 2004, 『マンガが語る教師像』 昭和堂

山田浩之, 2010, 「教師」有本章他編『教育社会学概説』 ミネルヴァ書房。

油布佐和子編, 1999, 『教職の現在・教職の未来』 教育出版。

ABSTRACT

**Trust and Distrust: Changing and Complex Views
of Teachers in Japan**

YAMADA, Hiroyuki

(Hiroshima University)

1-1-1 Kagamiyama Higashi-Hiroshima,

Hiroshima 739-8524

yam@hiroshima-u.ac.jp

In this paper, images of teachers are clarified using novels, movies and comics published after World War II in Japan. The complex views of teachers described by the term “enthusiastic teachers” are discussed. Even today, stereotypical images of “enthusiastic teachers” appear in TV dramas in Japan. This image depicts trust and expectations toward teachers. However, it is also easy to find criticisms of teachers in the media. In this article, we examine how these complicated views of teachers have been constructed and how the stereotypical images have changed over time.

The idea of “enthusiastic teachers” emerged in the novel *Seishun towa nanda* (What is adolescence?) by Shintaro Ishihara. The characteristics of “enthusiastic teachers” are as follows: (1) Enthusiasm toward education, (2) Lack of teacher-like behavior, (3) Ideal human type, (4) An emphasis on the relationship with students, (5) Involvement in problems going into areas of privacy such as family and friends. These stereotypes of teachers evolved from actual Japanese teachers, who had strong relationships with the families of students.

On the other hand, since the 1980s, “enthusiastic teachers” have disappeared while “delinquent teachers” have emerged in Japanese comics. These “delinquent teachers” never concern themselves with problems that infringe upon the privacy of students. This shows that since the 1980s, actual teachers have not been able to involve themselves in such areas. Nevertheless, teachers are still expected to act like “enthusiastic teachers” and to deal with the private matters of their students. Therefore, teachers do not fulfill the social expectations, as it is impossible for actual teachers to do so in contemporary situations.

One of the reasons for the distrust toward teachers is such stereotypical images. There is a need to examine these stereotypical images of teachers and introduce various images of individual teachers in the real world. This is an important task for researchers.

Keyword: images of teachers, media research, enthusiastic teachers